

# 真言と解釈 (17)

—現世の光—

金子大榮

今日からは、いよいよ最後の第五講で、題は現前・現世の光です。今まで話してきましたことはすべて真宗の教は浄土というものが重要な意味を持つておるのである。そしてその浄土というのは、あの世、すなわち彼岸の世界であり、未来の往生といえば、来世の往生ということであると言ってきたのであります。

ところが、そういう点から浄土の教というのは、現実の生活に関係のないものであるかのように考えられておる。そのあやまりは、第四講におきまして、「難信と疑惑」ということで一応説いてきたのであります。しかし、この浄土の教えというのは今までいうてきました意味におきまして、それは現生に光を与えるものであり、現生に意味を与えるものであり、現生の依つて立つところを明らかにするものである。その目指すところは、言うまでもなく、現実の生活というものに意味を与えるということであります。おそらく人間の考えることは、たとえどう言おうとも現実の人生というものが問題であるにちがいないと思います。ですから、死後の浄土を説き、あの世ということを説きましても、それは現実の生活というものに何かの関わりがあるからでなくてはならぬのであります。従つて問題はいつでも現生、現世の生活というものが問題であつて、いかに答えられようともその答えは、現世の意味を明らかにしたものでなければならぬということと言うまでもないことであろうと思つておるのであります。それがどうして後生とか来世

とかいふことが現実にかかわりのないもののように考えられるようになったかといふことは、却ってそこに問題があるのではなからうかと思うのであります。まあそういたしまして、真宗の教えの上におきましてその現世というものにかえしてみますというと、おおよそ三つのものがあります。一つは現生、現生不退といふことであります。『教行信証』で申しますと、現生に十種の益を得るといふことであります。そして、二つめは「現世利益和讃」です。これはまあ『教行信証』の「化身土文類」の末巻にもあるんですけども、まさしくは、『浄土和讃』に「現世利益和讃」といふのがありまして、何かこう現生十種の益というものと違ったような感じをさせるものがあります。だから現生不退と、それから現世利益と、それからもう一つ還相、還相回向といふものです。それは覚りを開いて還ってくるということなんですから、まあそこに色々な問題が有りますけれども、しかし還相生活といふものは、申すまでもなく、煩惱のこの世における生活であります。そうしますと、真宗といふものの全体がもう現世の生活を明らかにするものでありますけれども、ことに問題として現世のことを考えさせるものは、この三つであると言っているのではありません。それで最後の第五講としましては、現世への光としてこの三つのことを一つ一つ明らかにしていこうと思うのであります。

それです第一は、住不退転といふことです。現生不退でもよろしい。浄土の教えの中におきまして、法然上人の教えを受けながら、多くの法然門下の人々の説は、臨終正念で浄土へお参りするのであるから、死に際がめでたいと浄土へ参れるといふふうにならされておる。臨終正念の教えである。それに対して親鸞の真宗は現生不退であって、この世において不退転の位に住するのであるといふことであります。まあ現世といえは現生不退といふことで、現世利益や還相回向といふようなことを問題にしないといふことがあります。宗学におきまして、現生不退といふことだけが真宗の説こうとする所であるといふことであります。ところでこの現生不退といふことは、一体どういふことなんであろうか。第十八願の成就の文にありまして、「即得往生住不退転」といふ言葉があります。「聞其名号信心歓

喜」「至心に回向したまえり、かの国に生ぜん」と願すればすなわち往生を得て不退転に住す」「願生彼国・即得往生住不退転」とあります。そこでこの「即得往生住不退転」という言葉の解釈を見ますというと、仮名書きのものですが、『一念多念文意』それから『唯信鈔文意』にもありましたかな。「即得往生住不退転」のことを解釈して宗祖はいつでもこう言っておられます。即というのは時を隔てず日を隔てないことである。即得の即とは即時ということでもあります。だから信心をいただけはすぐその場でその時すぐさま往生を得るのである。「これを不退転に住すというなり」と、こう言うてあります。そういう点からして往生は現生であると、こういうふうにいただくことが出来るのであります。そしてその時を隔てず日を隔てずということは、臨終をまつことではないという意味におきまして、宗祖の解釈は非常に力強いのであります。信心を得るということは即時に、もうその時に、現生において往生を得るのであると、こう言うてあります。それはまあ昔からそう言われていたのですけども、昨今では曾我先生は殊に強調しておられました。みなさんも何度も聞いたであらうが、寸分も隙がない御説明であります。近頃「中外日報」を見ますと、西本願寺の上田義文氏ですか、あの人もそういうことを言うております。御聖教を見ますと、それはもう寸分も隙のない御説でありますけれども、ただあそこを読んでみて不審に思いますことは、「現生十種の益」の中に「即得往生の益」なんていうことはない。つまり即得往生は利益でないからであります。即得往生を説明するのにいつでも住不退をもって説明してあるのであります。即得往生する、それを住不退転というなりといわれています。住不退転という言葉で、即得往生を説明しようとしてあるのであります。それが一体どういうもんであるのかと思うのです。と申しますのは、往生ということとは場所に関することではありません。お浄土ですからね。このお浄土という所へ行くのであるというのが往生の語義です。そこからみましても、要するに未来、来世という感じがあります。あるいは浄土は超越の世界であるならば超越の世界へ向っていくこと、この世を越えて一つの別個の世界が開けるといいうことであります。精神界というものがここに開けてくるのであるということでもあります。往生は浄土という場所に関

する言葉であります。ところが不退転は読んだとおりに退かないということですからねえ。即得往生は未来に向つての前進であるならば、住不退転は過去へ向つての退転しないということなんであります。そして即得往生は浄土教だけの言葉でありますし、住不退転は、仏法はすべて住不退転を求めているのであります。ですから即得往生ということには住不退転ということによって受け取られるのでありまして、言葉の概念から申しますと、即得往生からすぐには住不退転は出てこないであります。住不退転ということが、仏法を求めるものには要求されておるのであるが、その住不退転というのは即得往生によって満たされるのである。即得往生が住不退転という利益を与えるのであると、こういうことであります。即得往生は前進的でありますし、住不退転は退かないという言葉の感情を持っておるのであります。そういったしますと、即得往生ということについてその喜びを住不退転で感じておられたに違いないということだけは明らかに言えると思うのであります。その「即得往生住不退転」の解釈を『教行信証』で見ますというと、『教行信証』『信巻』の末巻には、即得往生の解釈は「横超断四流」であります。横超というのはということで「断四流」の御説明をなされています。非常に感激の多いお言葉であります。善導大師が「横超断四流」といわれたのがすなわち即得往生である。住不退転を解釈するに眞の仏弟子は、とこう言うてあります。そこでも、もう横超ですからね。生死の世界を跳ね越えて、そして今度は超越の世界へいくのである。そしてもうこれで迷うということはない。断は、迷わない、迷いの世界へ帰っていくことはないという、そういうことです。断四流の方がやがて住不退転にと連なるのでありましょうが、しかし住不退転の解釈は眞の仏弟子で言われてゆきます。そういう所にも即得往生という言葉によって与えられる感じと、住不退転という言葉によって与えられるものとは、何かこう別なものがあるようにありますが、それは別なものじゃなくて一つであるとされたところに宗祖の心境があるのであるとこう言つてよいのでなからうかと思うのであります。

即得往生というのは願生彼国である。願生彼国即得往生である。願生彼国の他に即得往生はない。これは重要な思

想であります。片や如来の本願においても、本願成就というのは、本願が起き上ってもう何もすることがなくなつたということじゃない。本願を本願として満たされ、本願を本願としてそれ自身に欠けたるものがないことを本願成就というのであります。たとえばですね、学者というものは、幼稚園の幼児から小学校の生徒までも学問しているんだから学者といえは学者なんだ。けれども中学校や高等学校の生徒や大学生のことを学者とはいわれないんだ。それはどういう理由があるかというところ、学者の境地がないということでしょう。勉強せにゃならんといえは不転転でありますけれども不転転地ではない。地というのはその境地なんです。そしてそれは学んで倦まない。楽しんで楽しんで倦まない。「努めて学ぶものは、楽しんで学ぶものにしかず」ということがあります。努めて努めて励んで勉強せんならん、「ならん」ではまだ本物じゃない。私は本を読むのが好きだということになれば一歩進めた者であります。これが楽しみでねえ」ということになればね、それは所謂学者の境地というものがある。だから龍樹は不転転といわないうで不転転地と言うておる。不転転地というのは、住不転転であります。即得往生というのは願生彼国のことであるから願生の喜び、浄土へ参らしていただくのであるという願生心の満足、それが即得往生なんであって、もう願生する必要はない、往生してしまつたんだからというようなのは偽物であつて本当の往生とは言えない。本願成就ということは、本願そのものの内に成就が包まれていなくてはならない。それを整理して言うのは回向でしょう。至心回向でしょ。なんとすれば、願生彼国ということは、回向なのである。我が求めてということではなくして、如来招喚の勅命であるのであるから、招きに応ずるのであるから、だから自然法爾に、願生彼国がすなわち即得往生ということにはかならない。だから願生彼国をやめてしまつたら即得往生というのは成り立たないのである。そういうことを述べられているのだと思いますね。そういうことを誤解するということとんでもないことになるのであります。まあ信心をいただいしまえば、もう往生したんだからさらに往生する必要はないんじゃないかということではない。往生に望みをかけ、往生に願いをかけ、その願いに満足することが即得往生であるということであると云われるのでしよう。

それで宗祖はそれを住不退転と、こう言われたんであります。ですからして、即得往生を住不退転ということで解されたということは、不退転に住するものは時を隔てず日を隔てず浄土に往生しつづつあるものであり、往生しつづつあるものは往生したものであると、こう言ってもよいのであります。そういうような意味におきまして、即得往生はすなわち住不退転であるには違いないけれども、もう一つ元に戻しますというと、往生ということは場所に関することであります。そして、住不退転ということはその人の自覚ですからね、何か仏道、人間道、道というものに関することであります。不退転というのは道を進んでいく、退転することなしに覚りへの道へ行くというそういうのが住不退転であります。そうすると往生の方は受くる喜びであります。そのようだから、即得往生を現実の経験とすれば、ここで浄土の音楽を聞き、ここで浄土の風光に接するのである。清沢先生は、「我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るときは我が世に処するの道閉ず」とこう言って、「もし世に他力の救済なかりせば、我は迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。しかるに今や濁浪滔々の闇黒世裡にありて、夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、その大恩高德豈に区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。」といわれています。それは、清風掃々の光明海というものが浄土であると、こういっておられるのでしよう。だから信心をいだけば一つの別個の世界が開けてくるのである。しかし、往生を、その別の世界が開けてくるのであるということの意味に解釈して、もう往生してしまっただんたというふうに解釈してはならないと思うのであります。信心をいただいたから、往生してしまっただのであって、だから臨終になってもう一遍往生する必要はないんだというようなことではないに、やはり往生ということは往いて生まれるのでありますから、浄土を願うべく、往生を願う生活がすなわち往生の生活であるということではなければならぬのでしよう。

現世往生ということの了解について、先生方は非常に苦勞していらっしやる。にもかかわらず多くの読者や、あるいはその話を聞いた人には、何かこう聖道門的なことでも言われるように思っている人がありますが、そうじゃない。

そうじゃないということを私はここでははっきりしておきたいのであります。そういうような点から考えますというと、信心をいただいたのはすなわち往生であると。即得往生という時を隔てず日を隔てぬ往生であるというんですから、信心をいただいたことを即得往生と言うのであると、こういう言葉がもっともこの直接に考えるところの道がないうものであろうかということについては、昔からの講者でも色々なことを言うておられます。慧然という講師がおられます。これはまあ学寮の講師で一番始めは、慧空という方ですが、二代目は慧然という方です。その慧然という方の『大無量寿経』の講録を若い時分に読んで非常に感激したことがあります。そのなかで、四十八願における国中天ということ、それは信心の行者のことである。念仏を信ずる者が国中の人天でないかということです。四十八願を説明してあります。だから国中の人天は地獄・餓鬼・畜生がない。地獄・餓鬼・畜生のないという所に、そこに浄土がある。それで充分であるのに第二の願には国中の人天は三悪道に帰るといふことはない。帰えることはないといふことは、住不退でなくてはならない。こういうことで、第十一願の「正定聚に住して必ず滅度に至る」といふ必至滅度の願でも住正定聚といふことはすなわち国中天のことである。国中人、すなわち現生の念仏を信ずるものが、それが住不退転である。だから必至滅度といふことが出てくるにちがいない。こんな解釈がされてありまして、古い講者には、そういう解釈をせられた人も多いんであります。いいんじゃないですか。しかしそれはいつも申しませうように、その人の気持ちになっただけならば、有難いんですけども、それを固定化して、だから浄土といったって信心したものに感ぜられる他なものないんじゃないかと言って、この世の中にあの世というものがあるのではないかというように、どうもなりがちになる。それはつまり言葉というものの約束ですからね。言葉というものの約束で言葉の中に盛り込んでいる感じというものを見失って、そして筋だけおうという間違うということ、香月院というようなお方は、そういうことは言うべきものではなく、国中人とは浄土の人であって、これはまあ人間でないんだ、というように言うてあります。けれども慧然講師あたりがこういうことを言われたことも一応参考に

今日は言うのであります。

曇鸞大師の『論註』を見ますというと「穢土の仮名人、浄土の仮名人、一にあらず、二にあらず」ということがいわれています。礼拝、讃嘆、作願、觀察、回向という五念の行を修する人間とは、穢土の仮名人であるか、浄土の仮名人であるか。仮名人というのはつまり、人といい、我というのはいないという点から仮名人といっているのであります。彼というも我というも仮の名である。したがって念仏信者というのはこの世の人でもあるし、あの世の人でもある。あの世の人であると言おうとすれば、この世の人であり、この世の人であると言おうとすればあの世の人である。こういうような風に解釈してみたことがあります。これは若い時分で、今風に言ってみたくもありません。もっと直接的に申しますというと、天親菩薩は五念門ということを書いておられます。礼拝、讃嘆、作願、觀察、回向という五念の行を修して、そして、近門、大会衆門、宅門、屋門、園林遊戯地門と、五念門に依って五功德門ということが説かれてあります。そして入出ということを言うて、前の四門は入、第五門は出、というような入出ということ言うておられます。入門ということは浄土へ入る門ということであるが、それがつまり宗教の世界へ入る入門である。宗教入門というのは礼拝である。手を合わせるということが、それが宗教入門である。讃嘆は、人々の仲間へ入って、そして念仏をするということである。だから念仏をするということは、この世におりながら常に浄土の人々と一緒にすることである。この近門と大会衆門は『正信偈』を読んでみましてもね、現生のことでもあります。安楽国というものを蓮華藏世界というものと区別してね、始めの礼拝におきましては、安楽国に近づくのである。それから作願門へ来て蓮華藏世界へ生まれると、こういうふうに言っております。

そういうような点におきましても、もう往生ということは既に合掌し念仏するというその時に往生人であるということが言えるということも当然言えることなのであります。しかし、そういうようなことを強調してよいわけなんですけれど、それを妨げるものは何であるかということ、なんといってもこの世はこの世でないであろうかということ



しょうね。この世はこの世でないであろうか。念仏申しそうらえども煩惱は依然としてある。煩惱妄念のある所、それがこの世でないであろうか。だからして往生定まるとか、往生する身になるのだということは分かる。分かるけれども、その時に往生ということは先程から申しますように、動詞であってね、名詞じゃないんです。だから往生しつづめることなんですから、それはよく解かるんだけど、それにも関わらず現生往生とこう言うことを宗祖も何か差し控えておいでになる。というのは一体何であろうかと言えば、まあそこに現生というものの中に現世というものが考えられているからではなかるうか。現生だけでなく現世というものが考えられるからでないでしょう。か。現生といえは、主体的ですね。私自身の生活であります。現世というと、情勢であります。世界です。「現世利益和讃」を読みますとはつきり解かりますがね。現生と言う時には全て私自身、私自身が負うてゆかなくてはならないものです。現世というと「世界情勢が」というようなことであります。従って現世はと言いますと、現実の世界はと言うと、まだまだ大学もあややって騒がしいですし、安保条約はどうであるということをいっています。それでも我々は浄土であると感ずることが出来るであろうか。そこは現世利益の大きな問題であります。そういう点におきまして、そのことを宗祖も、『教行信証』もまだ未完成であると言われますが、まあそれでもありましようが、何かして、そこそこにもう一つ躊躇いがあってね、まさに即得往生であると言わなきゃならんのであるが、その即得往生ということを我々の経験に訴えて、我々の実感に訴えて何かそこにもうちょっと会得すべきものがあるのじゃないかということが考えられるのではないでしょう。それで私はかつて世界内浄土ということをしたことがあります。浄土というのは世界外であります。この世は穢土でありますから浄土はこの世を超えたということであります。しかしこの世を超えて横超の世界ですから、この世を超えての世界であるに違いありませんけれども、しかし我々はそれをどこで感じるかというと、世界内において感ずる。世界を超えて外といえますれば世界外であるべきところの浄土を我々が世界内において感ずることが出来る。そうすれば雨が降っても風が吹いても念仏のある所、そこに静かなるも

のがあると感じることが出来るのであろうか。世界が不和であっても動乱しておっても、動乱の盛んなるその中にあって一筋静かなる境地を見出すことが出来るということが、それが世界内浄土と言っているのだからあろうか。この思想は、今回の宗教講義の始めから諸君は気付いておるはずだと思おうのでありますが、あらゆる文化を超えてあるものか、あらゆる文化の底にあるものかということでもあります。宗教というものは哲学だの芸術だの道徳だのというあらゆる文化を超えてあるものであるか。あるいはその底を流れるものであるか。数学的に言えば最大公約数であるのか、それとも最小公倍数であるのかということでもあります。そしてそれがそう語っておいても実は一つなのである。超えてあるものは内にあるものである。超えてあるものを内に感ずることが出来るということであるに違いないと思います。こういうような意味におきまして信心をただけば、すなわち現生において浄土へ往生するのであるという、その説は非常に尊いのでありますが、固定してその底を流れる実感というものを見失なってしまうえば、もはや仏法でも宗教でもないものになるのであり、もう往生という言葉すらも用いる必要がないことになってしまふであらうということでもあります。そうしますと、「即得往生住不退転」と、住不退転と言うのであると言っております。そして現生不退というであります。その現生不退ということとして説かれたものが、それが現生の利益であります。「信巻」に説かれてあります所の「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣・八難の道を超えて、必ず現生に十種の益を獲」と、現生に十種の益を獲るところ言うてあります。そこで現生の十種の益というものをずっとみていきますとね、十種の益の内においてまず注意すべきものは第一の「冥衆護持の益」と、それから第十の「入正定聚の益」であります。最初に「冥衆護持の益」というものが出てくる。「冥衆護持の益」というものはそれを広げたものが「現世利益和讃」であります。冥衆というのは天神地祇であり、四天王だとか、あるいは何かたくさんありますね。色々な神、梵王帝釈とか、それから閻魔王とか他化天の大魔王とかというようなのが冥衆であります。その冥衆が我々の生活を護つて下さるといのが始めにあります。この「冥衆護持の益」といふのを広げたものが「現世利益和讃」であります。

だから「現世利益和讃」というのは「冥衆護持の益」を広げたものである。そして、その十種の益を最後に「入正定聚の益なり」というてあります。だから現世にしろ現生にしろ我々の得る所の利益を全て入正定聚の益であると、「現生不退の益」であると、こう考えれば、現生の利益も現世利益も結局住不退転の益に収まるわけであります。最初の冥衆護持のところへもって来ますれば、現生の利益というも、おそらく皆、現世の利益であるところ感ずることが出来るのであろう、そうでしょ。現生というものと現世というものとの間を縫っているものは、もう一つ考えてみなきゃならんものがあるのではないか。そうですからして現生十種の益は、まず最初の「冥衆護持の益」とそれから最後の「入正定聚の益」というものを抜いておきまして、そして後の八つを考えてみますというと、まず、「至徳具足の益」と「転悪成善の益」というものです。至徳具足ということは、念仏のうえにあらゆる徳がそなわっておるということであります。その徳はどう表われるかということ、悪を転じて善とする。ということ、災いが幸せになるということであります。これはまあ、念仏する者によって感ぜられることであります。至徳具足とか転悪成善とかいうことは、現世利益の方へもっていきまますという、もう一つはつきりするのでないかと思えます。例えば、

南無阿弥陀仏をとなうれば

この世の利益きわもなし

流転輪廻のつみきえて

定業中天のぞこりぬ（『浄土和讃』）

と、こういうようなのは、いわゆる転悪成善でないであろうか。とにかく「現世利益和讃」の上においては、南無阿弥陀仏において至徳がそなわっている、あらゆる徳がそなわっているということがいわれます。災いを転じて幸せにするというふうなことがまず現世利益ということと思われざるものであります。

それから「諸仏護念の益」と「諸仏称讃の益」というものです。これは念仏を信ずる者、そういう者によって感ぜ

られる同期の親しみ、共に本願を信じ念仏を申す者によって感ぜられるところのその喜びというものであると実感することが出来るのでないであろうか。別にどこにもそういうことが言うてあるわけではありません。一体真宗における諸仏とは何んであるということを昔の講者たちは、いろいろいわれております。真宗における諸仏というのはなんぞやということが、これは一つの問題であります。私は諸仏ということをいろいろにいただいていたことがあります。しかし了解するとか、いただくとかいうことはある意味において感想でありまして、感想にすぎないといえればそれまででありますけれども、しかしまあ感想でなければですね、何か言葉だけ憶えていなくてはならないというようなことになるようでもあります。そこで、諸仏とは何ぞやということについて今まで考えていましたことは、これは世の道のイデー (Idee) であるということでもあります。これはプラトンの哲学あたりから、影響を受けたのでありましょう。ものの根にはそのイデーがある、これは仏教では本尊、即ちその人の魂でなくちゃならない。その人のイデーでなくちゃならない。だからお薬師様というのはお医者様の本尊でなくてはならない。薬師如来に仕える者、それが医者でなくてはならない。観音というものは、母性愛的なものに考えられますわね。母としての本尊。聖徳太子の本尊が観音であったということではありますが、そうしますと何かこう素直な心で政治をとりたいたいという方の本尊が、慈悲・慈尊、観音であったと。そうすれば、五人おれば五人の本尊がある。『華嚴経』でありましたか、一切衆生の数程諸仏があると説かれます。こういうことで私たちが一面から見れば迷える衆生であるけれども、悉有仏性で、皆、仏心を持つておるんだという点から言えば、諸仏であるということが出来る。これも捨てられない感じであります。やや理屈めいておると言われるかもしれないけれども、私には、それは捨てられない感じであります。それから次に考えられることは、聖者なんでしょう。七高僧とかね。高僧伝に出てくるような、ああいうような人々は皆、とにかく仏法についてある覚りを開いたんだから諸仏である。高僧伝中の人々、皆諸仏であると、こう言っているのであります。それを広げて言えば、同信同行の人々、同じく道を喜び、同じく念仏申す人々を、諸仏というのであります、こ

う言うことであります。私などは何かそういうことを大変身に感ずるのであります。自分の言ったり書いたりすることを、「そうです。」と言ってくれる人は諸仏であり、諸仏称讃であります。そして「お達者でな。」と言うことを言われるのは護念です。諸仏の証誠護念です。諸仏の証誠護念の内に我々は生きていくことが出来る。諸仏の証誠護念なくして我々は現生不退などということも言うても始まらんことであるというように思うのであります。

しかし諸仏というものは何ですかねえ。『大無量寿経』を読んでもみると「乃往過去・久遠無量不可思議無央数劫に、錠光如来」と仏が出ます。五十三の仏がずらっと並べてある。龍樹の『十住毘婆娑論』『易行品』を読むというと、一百七七の七名前がずっと出ておる。『阿弥陀経』の諸仏の名前を見るといとね、なかなかこう味があるんですよ。音という字のついた仏はどれだけあるか。光という字のついた仏はどれだけあるか。五十三仏等を見るといかにも夜の光ということが感じられます。あの五十三仏の中に輝く昼の光というような仏は無いようであります。寂光の静かな夜を照らす星の光とか、月の光とかあるいは水に映る光とかと、何でもでたらめに並べてあるようでありますけれども、案外經典作家も一つの感覚があつて五十三仏には五十三仏共通の何かがある、『阿弥陀経』には『阿弥陀経』における何かがある、というふうなものがあります。そういう諸仏の護念証誠というものがある、信心相統するに違いないけれども、また逆に申しますれば信心相統の境地は諸仏の護念というものを感ずるものであるところ言つてよいのでしよう。

それから次に、「心光常護」と「心多歡喜」というものが出て来ます。この二つは正しく必至滅度のための住不退転です。その住不退転というものはどういふことであるかという、住不退転そのもの、そのものの心境ですね。それは、

#### 十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる 『浄土和讃』

という撰取の心光のゆえに、心光常護のゆえに不退転に住す。不退転ということは、阿弥陀の心光常護のゆえに、撰取不捨のゆえに、正定聚に住する。和讃など読んでご覧になりますとわかります。撰取不捨のゆえに正定聚に住す。即得往生のゆえに不退転に住すとは、即得往生は不退転なんであって即得往生のゆえに不退転に住すとは、言われてません。どういう理由で、どうして不退転に住するのであるかということになると、心光常護して撰取不捨のゆえに正定聚に住すということなんです。正しく住不退転こそ現生の利益であるということとを証明するものは、それは心光常護ということであるようでもあります。それから、心多歡喜ですが、心多歡喜が正定聚であるということとをあらわすものは、これよりもあるはずですね。例えば『教行信証』を読んでみましても、龍樹菩薩の文に、般舟三昧と大悲無生を父母として、如来の家に生まるといわれるのがあります。この如来の家に生まるといことは浄土である。本願を信じ念仏を申せば浄土、如来の家に生きる。その家に生まれるのは現生であるに違いありません。そして、歡喜地、歡喜の境地である。住不退転ということは、歡びの多い、歡喜の境地であるということが言っているのです。心多歡喜ですね。まあ、いつも言いますように人間として生きていく事の悲しみを知らない者は、本願に遇う事の喜びは知らない。人と生まれてきての悲しみを知らない者は、人としての喜びを知らない。いつでもそれを感じるのです。年寄りになって、一生を思い出すと、その思い出の中には、うれしい事もあったし、楽しい事もあったんですけど、何か知らんが悲しい事だけが思い出となる。そのような世界である。でも、心多歡喜の益あり、と言われるというのと、ああそうであったなあと思います。悲しいことのみ多いと解っても、それがいつも悲しいかと言えはそうでない。それが転じて、そして歡びが多い。どっかに心の平和がある。心光常護、心多歡喜ということが、これがいわゆる現生

不退の境地だと言ってよいのではないか。

「残るのは「知恩報徳」と「常行大悲」ですがね。恩を知ることが、それが現生の利益であると、こう言っています。知恩報徳だの常行大悲だのということは、むしろ受くるものではない。そうでしょう。今まで言うて来ました心光常護でも心多歡喜でも受くるもの、感受するものであります。しかし、知恩報徳とあの常行大悲については、こちらから表わすものである。知恩報徳、知恩は感ずるものでありましても、報徳は徳に報いるのですから、そこで信心正因称名報恩ということがある。これはまあ、西本願寺では殊にそれは重要な名目である。東本願寺だって鍵がかかっているはずがない。「唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩」とありますからして、念仏を申して、如来の恩に応ぜよというてあります。けれどもですね、それを決めてしまってますね、信心正因称名報恩と、こう言ってしまうものだから、本願の名号は正定の業なりと言われることと矛盾しないかというような問題が出て来るんですね。要するにみんな頭で決めようとすることなのでしょうね。念仏が正定の業なるが故に我々は、知恩報徳のころをもつて、称えることが出来る。本願の名号は正定の業であつて、念仏が浄土往生の種であると教えられたんだから、じゃあ正定の業を励みましようでは、正定の業にならないんですわ。本願の名号は正定の業なりと定められた。その教えを感ずるところが仏恩報謝ということより外ないのであります。

報恩と言つたら大体そういうことであります。報徳ということは、知恩ということでもあります。恩を知るといふこととであります。恩を知るといふことは、有難さを感じるということとあります。だから本願名号正定業ということとは有難いことであるという、有難いことであると感じて称えるより外ないのが、称名なんです。何故有難いと感じて称えるよりほかないかと言うと、正定の業なんだからということなのであります。往生そのものは信心であつて念仏でないというようなことまで言わなくてはならないようになって来るのは、大変な間違いであつて、そうではない。念仏は正定の業である。念仏、仏の名号によってのみ我々が救われるということに気付くのである。これは有難いこと

であるということと称えられるのが、それが正定の業ということなのである。正定の業ではなく報恩の業だというように、そういう区別のないことなのであります。宗学というものは、何かそういう所にいつも、学問しなきゃ解りませんけれども、又、学問の陥り易いものは、そういう所にあるわけなのであります。

そして、常行大悲ということは一体どういうことなのであるか。本願を信じ念仏を申すということは、常行大悲である。常行大悲は利他であります。念仏して往生するということは、それは、自利であります。その自利が即ち利他である。自利のうちに即ち利他の徳を具えておるのであるということでもあります。そうすると常行大悲ということは、やがて還相回向ということにつながってくるわけであります。

それで、常行大悲ということと、還相利他ということと、同じなのか違うのかという問題が出て来る。忘れもしませんが、もう十年、二十年も前であったか、富山県で勉強しておられる団体から、自信教人信という教人信と常行大悲ということと還相回向ということの三つは、どう違うんですかという問いをうけたことがあります。同じことなんだろうな。同じことなんでしようけど、何かそこに感覚が違う。その感覚が違う。違うところに自信教人信ということやはり教人信という働きがあります。殊に教えるということ。自信を持って語る。これは前に申しましたね。自信を持って語る。自信とは、私にとっては機の深信である。自分は愚かな者であるという自信さえあれば、本願の法の深信を語ることが出来る。自信がないものがどうして教人信が出来るんですかと、学生時代に先生を困らしたことがあるのであります。しかし今日になって考えてみると、自信がなければ教人信が出来ない。しかし、その自信とは何ぞや。自分は愚か者であるということなんだ。この自信さえあれば、教人信が出来る。教えの誤りのないことは、機の深信、自分がそれを受容することなんであります。だから、感応というものがそこにある。機の深信と、法の深信とは、そこに感応があるのであって、その感応が機の深信において法の徳を語らしめられるのであります。だから、教人信というものがそこに行われ、教人信は働きとして行われる。



常行大悲ということ、自らなるものおのずかであるとか、これに呼応しているのであるとか、こう語るものであるとかいうことでなくして、本願を信じ念仏を申しておることが、それが常行大悲なのである。どうせんでも、信心の徳が常行大悲である。信心があるということが、いわばその人の存在が、常行大悲なのである。念仏者としての存在が、常行大悲ということでもあります。それが更に、もう一つ、教えということでありましても、ただちに本願を教えるということではなくして、色々と方便によって人を見据えていくということ、いわば念仏者の心掛けというようなものが、還相利他ということになるのではないであろうか。そうすると、知恩報徳ということも、その感情において行われるのでありますから、最後の知恩報徳と常行大悲とは、還相利他の徳というものに含まれており、心光常護と心多歡喜は住不退転である。それから、諸仏の証誠護念は、それは我らの喜びである。信心歡喜の喜びである。至徳具足と転悪成徳とは、どこかで現世利益というものと思えばあわせるものである。そういうことにおきまして、現生の利益というものは、ひっくるめて、先程も申しましたように、自分において感じられるものでしょう。こういったことはよく知りませんが、今日の言葉を用いますと主体というようなものでしょうか。主体として、私自身に於いて感じられるものが、これが、現生の利益というものである。そういう生活する者にとって現世というものにある見方を与えられる。現世というものが、現世そのものが、どうにもならん世界が、それはそれでよいものであるというそういう道を与えられるものが、現世利益というものであるに違いない。こうして、現世利益というものを、もう一つ考えてみたいのであります。現世利益のことにつきましては、今まで何遍も講義してみたことはあるんですけども、もう一つ付録みたいだね。真宗の教えとしては付録のような気がして、時にはどうでもよいもののように考えられていますが、何かそうでないものがあるんじゃないかなあ。「現世利益和讃」というのがあり、邪道に陥ってはならないと戒められる場合も、念仏する者には現世の利益があるんだから、それ以上凡夫の計らいで現世利益を求めてはならないと言われる。そういうところに、考えとるのであります。こういうことを考えているのであるから、諸君の方でも、

もう一つ徹底してくれてもいいのであります。それは、『歎異抄』の「第七章」です。「念仏者は無碍の一道なり」と言うてね、「そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」と言われます。これは、「現世利益和讃」ですよ。そう思ってみますというのと、「罪惡も業報を感ずることあたわず」と言われることも、これも「現世利益和讃」に出て来ます。そうすれば、「諸善もおよぶことなきゆえに」ということもひっくり返して、現世利益でないであろうか。『歎異抄』／＼と言って、喧しく言われておりますが、私も「第七章」を何度も講義したんですけれども、今始めて気が付いたんですが、あそこにあらわれておる信心の行者の無碍の一道ということ、これは「現世利益和讃」です。だから現世利益とは何ぞや。人生に於いて、人生を無碍の一道たらしむるものであると、こう言っているのです。

（本稿は、昭和四十四年十月二十日の大谷大学における集中講義「真言と解釈」の筆録である。文貞 編集部）

執筆者住所が掲載されているため  
リポジット非公開とする。